

令和6年度大学等の質保証人材育成セミナー vol. 2

「評価疲れ」のメカニズムと解消に向けたTips

「評価疲れ」のメカニズムと 測定尺度の開発

渋井 進

令和6年12月13日

まずは測定してみましよう！

- 市村先生が中心となって作成した測定尺度
- <https://jp.surveymonkey.com/r/F5DKSN2>

- 皆さん疲れてますか？
- ええ、僕は疲れてます！
- 「評価疲れ」の研究に疲れているんですよ！



「評価疲れ」とは？

- 大学評価を始めとする多くの評価においては、そのネガティブな側面として「評価疲れ」について言及されることが多い。
- しかし、「評価疲れ」は、**漠然とした語**として使用されており、その原因や生じるメカニズム、克服の可能性等について明らかになっていない。

中央教育審議会(2008) 学士課程教育の構築に向けて(答申)

(イ) 第三者評価制度の見直しに当たっては、分野別の評価をどのように進めていくかが重要な課題となる。

分野別の質保証の枠組みづくりを進めつつ、分野別評価へどのように進化させ、普及を図っていくか、その場合、第三者評価制度との関連をどのように考えていくか、「評価疲れ」という批判もある中、機関別・分野別両者の効率的で実効ある評価の仕組みはどうか、という観点から、どのような実

大学評価導入時には、作業負担に関する「評価疲れ」が中心

大学評価コンソーシアム設立趣意書(2009)

1. 「大学評価コンソーシアム」設立の背景

現在、我が国の大学においては、大学評価の手法の改善や、評価結果を大学運営に反映させるPDCAサイクルの確立が求められている。しかし、これらのための方策は未だ十分ではない。例えば、大学評価に係る過大なコストや「評価疲れ」が指摘されるとともに、多くの大学では、評価結果が大学経営に活用されておらず、評価が評価で終わっている状況にある。また、大学に評価文化が十分に

ここ数年、再び「評価疲れ」が

じゅあ JUA A

NO. **71**
 2023

高等教育の
 質の向上を目指して

巻頭言

「評価疲れ」を考える

大学基準協会 会長、津田塾大学 学長 高橋 裕子

「評価疲れ」を引き起こす要因として

第一に、受審する側と評価する側の負担感

第二に、評価結果の活用度や社会からの認知度の低さ

そのためにも、「評価」の成果が広く、多くの大学のステークホルダーに十全に活用され、大学ジャーナリズム界も含め、影響力を持って語られ、流布するようになることを目指していきべきだと考える。実現すれば、「評価疲れ」という言葉も聞かれなくなるだろう。

なぜ評価疲れが起こるのだろうか？

- 大学へのヒアリング調査に基づき、代表的なものとして
 - 執行部からの、良い評価を取らなければいけないという暗黙のプレッシャー
 - 内部質保証体制の構築として、強制される「自主的な」改善
 - 「動機づけ」の問題

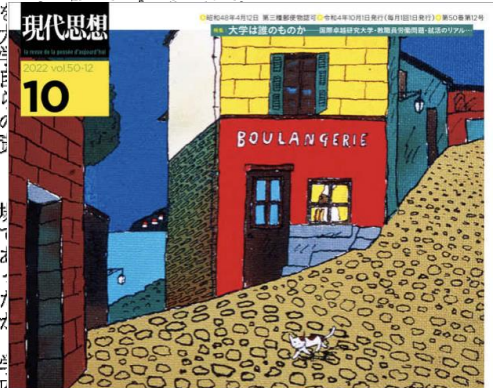
大学失格

「評価疲れ」と大学

渋井進

はじめに

二〇〇四年の認証評価の施行および国立大学法入から二〇年近くが経とうとしている。その布石える一九九八年の大学審議会答申「21世紀の大学方策について——競争的環境の中で個性が輝く土されるように、競争と評価によって改善を自主的とは、今や大学にとって日常的な業務として定着「PDCAサイクル等を適切に機能させることに上を回り、教育、学習等が適切な水準にあること」を「PDCAサイクル等を適切に機能させること」を「PDCAサイクル等を適切に機能させること」として説明し証明していく学内の恒常的・継続的プロセス」(2)とされる「内部質保証」の体制構築が大学に求められている。また、二〇一八年に「細目省令」(3)が改正されたことにより、現在進



石原俊十

隠岐さや香

研究と教育のゆくえを問う

阿部公彦
植木朝子
駒込武
重田園江
田中東子

大学は
誰のものか

国際卓越研究大学
教職員労働問題
就活のリアル

成田隆
山下英介

れ、「徒
評価制度
から今日
鹿児島
を表明し
を表明し
を表明し

機構内プロジェクトでの 研究内容 (令和3~5年度)

1. 「評価疲れ」概念の明確化

- 文献調査、機構が実施した評価における大学・評価者向け検証アンケートの分析、大学へのヒアリング調査

2. 「評価疲れ」の測定手法の開発

- ヒアリング調査を踏まえ、大学における「評価疲れ」の測定尺度の項目案を作成し、評定実験を通じた測定尺度の信頼性・妥当性の検討による精緻化
- 非言語情報に基づく「評価疲れ」の客観的測定指標の開発

3. 「評価疲れ」軽減へ向けた実践

- 研究会を組織して大学、評価機関の教職員からなる研究会を組織し、「評価疲れ」の軽減へ向けて取組を議論
- 「評価疲れ」軽減へ向けた、ワークショップ等の実施

「評価疲れ」をもたらす要因と軽減へ向けた整理

- 「評価疲れ」を引き起こす要因について、2022年4~5月に国立大学5校を対象としたヒアリング調査を踏まえて概念整理および、軽減策を考察。

1. 評価の自己目的化の問題

KPIの向上のみが目的となってしまう、他の基礎的な取組みが犠牲になるような設計は避ける。

2. 目標・計画の設定の問題

Evaluability Assessment (評価可能性のアセスメント)の手法を大学評価に適用

3. 「動機づけ」の問題

外発的動機づけとして求められている評価の中で、「内部質保証」に代表されるように、自主的な改善(内発的)を求められている。

外発的動機を与えることにより、内発的動機づけが低下するアンダーマイニング効果。

⇒すでに機能している改善に向けた取組に対しては、無理に介入しないことも必要か